

高橋一清「百冊百話 高橋一清の本の世界」61

永井路子「元就、そして女たち」(中央公論社刊)

改めて知った故郷 益田氏の実力

NHK大河ドラマ「毛利元就」が放送されたのは、平成9(1997)年であった。原作は永井路子さんの『山霧 毛利元就の妻』である。この作品は、昭和60(1985)年から翌年にかけて新聞の連載小説として書かれ、平成4年(1992)年に文藝春秋から単行本として出版された。ドラマ化にあわせて文庫版を作り、当時、文春文庫の担当部長であった私は、大いに販売した。

作品に描かれるのは、元就の前半生で、中国での覇権を獲得するまで。全国各地にいた「国人」といわれた小領主とその妻が、戦国の世をどのように生きたか、それまで誤解されていた「政略結婚」について考え直し、戦国とは男と女の二人三脚の時代であったことが書かれている。「政略結婚」を男たちの野望のために、人身御供として女のことを無視した惨めな結婚ととらえているのは見当はずれで、彼女たちは「戦国の大使」といい役割を担っていた。「婚家での働きが、一方では親善につとめ、一方では油断なく情報を収集して実家に通報する最高のスパイとしても活躍する」と永井さんは説明する。

テレビドラマでは、生涯200回以上も戦いを繰り返し、中国一の大大名になる後半生も描かれた。永井さんは、そのころの元就を小説ではなく、歴史読物『元就、そして女たち』として、平成8(1996)年の「婦人公論」に連載した。

その執筆準備が始まったころであった。永井さんに面会した時、いきなり言われた。

「高橋さんの郷里の益田氏は、大変な戦国大名ですよ」

私が作家の方から、ふるさとの大名のことを聞くのは、これが初めてであった。文献を渉猟して書かれる永井さんの言葉である。重みがあった。元就は武力衝突を最後の手段として、外交、政治戦略を駆使した。変身、変心、変節、裏切りなど当たり前の時代、あらゆる手を使って相手を切り崩す「調略」を得意の戦術にしたが、益田氏を元就が味方にするのに10年を要している。益田氏にはそれほどの武力と、それを支える富があった。

永井さんは、岸田裕之さんの研究を参考に、日本海の制海権を握り、通行税を取って航行の安全を保障し、手広く海外貿易も行い、巨万の富を得ていた「海の大名」「海洋領主」益田氏の実力を紹介する。この永井さんの書物で、益田氏のことを、初めて広く世間に知れ渡った。その権勢がどれほどのものか、故郷の者たちは、改めて知ることになった。私も、その一人であった。

(『毎日新聞』平成25年4月17日付け、島根面)